

令和 2 年 4 月 29 日現在

機関番号：17401
 研究種目：基盤研究(C)（一般）
 研究期間：2016～2019
 課題番号：16K04035
 研究課題名（和文）国民国家から世界社会への変動のなかの言語と社会理論 その時代的背景と理論的進化

 研究課題名（英文）Language and Social Theories within Transition from National Society to World Society: Inquiry into their Sociohistorical Backgrounds for Further Theoretical Evolution

 研究代表者
 多田 光宏（Tada, Mitsuhiro）

 熊本大学・大学院人文社会科学部（文）・准教授

 研究者番号：20632714

 交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,000,000円

研究成果の概要（和文）：国民国家形成期を生きた社会学者ヴェーバーとデュルケムの言語観の内実と背景を、社会言語学や歴史学の知見も踏まえて解明した。ヴェーバーについては、彼が中欧のエスノ言語ナショナリズムを批判し、言語共同体の構成を個人主義的に理論化していること、またデュルケムについては、フランス第三共和政の信奉者として、普遍的な人間理念の共有に伝語の共有が不可欠とする市民言語ナショナリズムに依拠していることを明らかにした。なお本課題の3年間（2016～2018）で、関連テーマでのものも含め、インパクトファクター付き国際誌での査読付論文3本（今後掲載のもの含む）、海外での招待講演3本、国際学会発表2本などで成果公刊した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

昨今のグローバル化により英語や英語教育の重要性が著しく増すとともに、非英語圏ではそれへの反発や「国語」への愛着（言語ナショナリズム）の増大が見られる。こうした現下のせめぎ合いを把握する手掛かりとして、過去の代表的な社会学理論家たちが言語をどう扱ってきたかを各々の時代背景を踏まえて解明するのが本研究の狙いである。言語は従来、社会学理論ではほぼ所与の基本媒体とされてきたが、このいわば方法論的ナショナリズムに対して本基課題研究は、ヴェーバーやデュルケムといった人たちの言語観が、まさに形成途上にあったドイツやフランスの国民国家の枠組に対する批判的ないし肯定的なスタンスに依ることを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：This research, which employed knowledge of sociolinguistics and historical science as well, clarified the contents and sociohistorical backgrounds of the linguistic views of Max Weber and Emile Durkheim, who lived in a period in which nation-states were being formed. This research showed that Weber theorized the constitution of the linguistic community from his individualist viewpoint, criticizing ethnolinguistic nationalism that was peculiar to Central Europe. This research also found that as a supporter of the Third Republic, Durkheim relied on civil-linguistic nationalism, which assumed the sharing of the French language to be necessary for the sharing of universal human ideals. During the three years of this research (2016–2018), this research's representative published the findings through two peer-reviewed articles in international journals with impact factors, three invitations to lecture abroad, and two presentations at international conferences.

研究分野：社会学

キーワード：言語 ナショナリズム 国民国家 世界社会 グローバリゼーション 社会学理論 社会学史 英語化

1. 研究開始当初の背景

今日、グローバル化のひずみで数多くのコンフリクトが各地で発生している。そのため、合意可能性に対する戦後知識人的な楽観主義は、もはや通用しなくなっている。わけても戦後社会学の代表的な理論や方法論、たとえば現象学的社会学やエスノメソドロジー、タルコット・パーソンの構造主義的システム理論、ユルゲン・ハーバマスのコミュニケーション的行為論などの多くは、言語メディアにもとづく合意ないし理解の可能性を前提としていたが、それはもはやまったく現実的ではない。なぜなら今日、言語そのものが、教育制度や経済競争、民族紛争などにおいて、人びとの争いの種となるケースが少なくないからである。

そのため本基課題研究代表者は、従来の社会学理論における「相互主観性」の優位、とくに人びとの言語共有という観念を批判しつつ、2013年に公刊した社会システム理論の単著の一部において、社会的コミュニケーションの成立における「主観的」基礎を示した(多田 2013)。相手と同じ言語を共有しているかどうかは、とにもかくにもコミュニケーションをしてみなければ分からない。つまり、相互主観的な言語共同体は、コミュニケーションの事前条件ではなく、事後結果である。本基課題代表者はこれをとくに、自律的なシステム再生産という自己準拠的システム理論のテーゼから、純粹論理的な帰結として示した。すなわち、相互主観的な何かは皮下注射的に人びとに等しく注入されることは、人間意識の自律的なシステム構造から見て、理論的にも不可能だということである。言い換えれば、何についてであれ人びとの個体差は免れえない、ということである。言語とは、つねに「個人言語」であるほかない。

以上を踏まえ、これまでの社会学理論の言語観を徹底的に洗い出すとともに、この理論的知見をさらに緻密に展開し、今日の世界社会の経験的状况に正確にフィットした、より現実な社会学理論の構想を目指すべく、本基課題研究を申請するに至った。人びとの合意や理解にとって言語の重要性は否定すべくもないが、以上で見たとおり、従来の社会学理論の言語観はあまりに素朴であったのであり、本基課題代表者はそうした素朴さの背景として、社会を国民国家と同一視する「方法論的ナショナリズム」があるとの仮説を考えたのである。社会学理論への方法論的ナショナリズムの広範な浸透ぶり自体は、すでに英ラフバラ大学のダニエル・チェルニロらによる近年の成果にも示されている(Chernilo 2007)。ただ、方法論的ナショナリズムがなぜ、またいかにして社会学理論へとそこまで深く浸透したのかは、まだあまり明らかにされていない。とくに言語は、社会学では他者共有の自然なメディア(自然言語)として前提される傾向が依然として強く、国民社会化を通じた標準化のプロセスはほとんど考慮されていない。戦後の社会学理論が、合意と理解の基礎と見なしてきた言語とは、実際にはそうした半人工的な「国語」にほかならない。

すでに本基課題代表者は、科研費申請時点までに、それまでの自身の研究を通じて、この仮説には強い確証を得るようになっていたこともある(Tada 2015a; Tada 2015b)。よってさらに研究の範囲を広げて、社会学理論一般の言語観に一石を投じることを目指すというのが、本基課題の出発点であった。

2. 研究の目的

本基課題研究の目的は、言語がこれまでの社会学理論でどのようなものとして捉えられてきたかを解明するとともに、言語的同質性を前提できない今日の世界社会について、新たな社会学理論の構築を行うことであった。戦後の社会学者の多くは、均一な国民社会(national society)を前提に、言語をコミュニケーションと意思疎通の基盤と見なして理論構築に取り組んだ。だが実際には、近代社会の言語は、多くが半人工的な「国語」である。そのため、「第二の近代」におい

てグローバル社会 (global society) が拡大するにつれて、言語的な抑圧に対する紛争も増している。本研究は、過去の社会理論において自明視されてきた言語観を抽出して、批判的に検討しつつ、脱国民化した世界社会の理論化を、言語との関係において行うというのが、本基課題研究の趣旨であった。

3 . 研究の方法

徹底的な文献分析による社会理論の言語観の抽出を、主たる研究方法とした。またその際、各理論において言語概念をどのような意味で、どのような文脈で用いられているか、可能なかぎり網羅するため、必要に応じてスキャナーと OCR ソフトによる文献インデックス化も援用し、補助員雇用によりコーパスを作成した。一部文献・資料の収集を海外でも実施した。

とくに焦点化したのは、ヴェーバー、デュルケム、意味学派、パーソンズ、ハーバマス、ルーマンの言語観であり、それぞれの理論的意義と各時代の社会史的背景である。いずれについても部分的に並行して精査したが、研究成果として論文や学会発表などでまとめるにあたり、本基課題研究期間中は、とくにマックス・ヴェーバーとエミール・デュルケムの言語観に集中した。前者のヴェーバーは方法論的個人主義 (あるいはミクロ理論) を、また後者のデュルケムは方法論的集合主義 (あるいはマクロ理論) の嚆矢とされることは周知のとおりであり、社会学史に見て、ヴェーバーとデュルケムの思想と問題設定は、その後のあらゆる社会理論のバックボーンとなっているためである。よって、まずは彼らの言語観を押さえておくことが、以降の他の社会学者の言語観を解明する上でも重要な準備作業と位置づけた。さらにこの両者が生きた 20 世紀初頭までは、ナショナリズムの高揚と国民国家の独立により、「国語」の数が世界で飛躍的に増加した時期にあたっている。もとよりヴェーバーの母国ドイツ、ならびにデュルケムの母国フランスは、いずれも建国の経緯と第 1 次大戦前後のヨーロッパ情勢のなかで、国民形成との関連で言語に独自の地位を与えている。すでに本基課題の代表者、先行する論文中で示唆したように (Tada 2015a; Tada 2015b)、そうした社会背景は、彼らの言語観と無関係ではない。ただ両名とも、言語概念への言及は、必ずしも特定の業績にまとまっておらず、著作や論文のあちこちに散らばっていたため、上述のとおりコーパスを作成し、分析の補助に当てた。なお、2 つの世界大戦を挟んでヨーロッパで大きな国境変動が生じ、言語地図も人為的に大きく塗り替えられた時代ゆえに、彼らの言語観の社会歴史的経緯についても把握・分析した。

4 . 研究成果

得られた成果は多岐にわたるが、ここではとりわけマックス・ヴェーバーとエミール・デュルケムについて述べる。

ヴェーバーの生きたドイツ帝国を含めて、中央ヨーロッパは、フィヒテやヘルダーの影響もあっていわゆるエスノ言語ナショナリズムの強い地域であった。ひとこと言えば、言語は民族精神の反映だという考え方であり、これが国家有機体論や歴史主義の基礎となっている。言語共同体がすなわち、固有の歴史をもった民族国家だということである。しかし、西洋合理主義を報ずるマックス・ヴェーバーは、通常歴史主義寄りとも解されてきたが、本研究の結果、そうした神秘主義的な言語観を徹底して退けていることが明らかとなった。たとえばヴェーバーは、『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』での、たいへんよく知られる「職業・天職 (calling; Beruf)」概念に関する議論において、この宗教的含意をもった「職業」という語の存在が、英独ゲルマン系の民族精神の発露ではなく、翻訳上の (翻訳者ルターの意図による) 偶然事として扱うことを強調している。このことに典型的に見られるように、ヴェーバーは、反ドイツ的伝統と

も言うべき仕方で、言語を徹底的に合理主義的・個人主義的に扱っている。やや年長の社会学者フェルディナント・テンニースは、「ゲマインシャフトからゲゼルシャフトへ」という社会変動の命題を提唱し、前近代的な言語共同体にゲマインシャフトの道徳的優位性をノスタルジックに投影したが、これに対してヴェーバーは、自身の合理主義的・個人主義的な行為理論にもとづいて、言語ゲマインシャフトの所与性を否定し、かつ、言語集団の形成としてはむしろ言語ゲゼルシャフト化が先行し、独特の結合感情にもとづく言語ゲマインシャフト化は事後的かつ例外的な現象だと見なした。このことを明らかにした研究はおそらくほとんど先例がなく、またこのことを本研究では、ヴェーバーを取り巻く当時の歴史的背景、さらには最新の社会言語学理論の諸知見を踏まえて明らかにした。

さらにデュルケムについては、彼が言語を「最高度の社会的物事」と呼び、他の種類の社会的事実（法、通貨、道徳、芸術、美学など）に比べて、言語にのみ暗に特別な地位を与えていること、さらにそうした言語観が、おそらくはフランス革命以降の普遍的理念の共有によるフランス市民社会形成のためであったことを、詳細な文献精査を通じて明らかにした。戦後の言語社会学の立役者トーマス・ルックマンは、理解社会学の祖ヴェーバーではなく、言語面でデュルケムの集合主義の意義を強調し、生活世界的な「コミュニティ形成」のためには言語は不可欠の媒体だと力説したが、実際にデュルケムが言語に求めたのはむしろ「ソサエティ形成」であった。こうしたことは、たとえばデュルケムが、ゲマインシャフトの道徳的優位を主張するテンニースに対し、ゲゼルシャフトのほうがその市民宗教の発達において、ゲマインシャフトよりも道徳的に優位すると考えて批判している点などにも見いだせる。別の言い方をすれば、デュルケムの理論的基礎には、啓蒙主義的な普遍的人間理念への信奉がある。このことを本研究では、当時のフランス第三共和政の教育システムにおける地域言語の抑圧ならびにフランス語モノリンガリズムと重ねつつ、デュルケム自身の単一言語教育論、ならびに反地方分権の中央集権主義として、本研究で明らかにした。デュルケムに関するこれら洞察も、既存の研究ではおそらく類例を見ないものと言えると思う。

グローバリゼーションが進むについて、国民国家の境界は融解しつつあり、その内部の同質性を所与の自明なものとはできない現在の状況は、むしろヴェーバーやデュルケムが生きた時代に似通いつつあるとさえ言える。その意味で、一方ではヴェーバーが神秘主義的・民族主義的な言語共同体の概念を解体しようとし、また他方でデュルケムが市民社会形成のためにリベラル・ナショナリズム的な言語同化の論理を展開したことは、たいへん示唆に富むものであり、その意味で本基課題の成果は、今後の世界社会コミュニケーションの社会学理論のための、いわば参照点を提供できるものと思われる。

以上については、具体的には、関連トピックも含めて、インパクトファクター付き国際誌での査読付論文3本、海外での招待講演3本、国際学会発表2本などで成果公刊された。なお本基課題は、科研・基盤Cにより、もともとは2016～2019年度の4年間を予定していた研究であるが、2019年度からは、いわゆる「研究計画最終年度前年度の応募」によって採用された科研費・基盤研究B「戦後社会学理論の言語観の解明－国民社会化からその終焉までの社会史的背景に照らして」（研究代表者は同じ）に、本基課題を発展させるかたちで引き継がれた。**すなわち本基課題は、実際にはこの前年度応募での採用により、当初予定より1年早く2018年度をもって廃止されており、上記成果は正味3年間で達成されたものであることを、参考までに付け加えておく。**

【文献】

- Chernilo, Daniel, 2007, *A Social Theory of the Nation-State: The Political Forms of Modernity Beyond Methodological Nationalism*, London and New York: Routledge.
- Tada, Mitsuhiro, 2015a, "From Religion to Language: The Time of National Society and the Notion of the 'Shared' in Sociological Theory," *The Annuals of Sociology (Shakaigaku Nenshi)*, 56: 123-154.
- Tada, Mitsuhiro, 2015b, "Language as a Zombie Category of Sociological Theory," *Per Wisselgren, Peter Baehr, and Kiyomitsu Yui eds., International Histories of Sociology: Conference Proceedings of the Research Committee on History of Sociology from the XVIII ISA World Congress of Sociology in Yokohama, 13-19 July 2014*, 371-379.
- 多田光宏, 2013, 『社会的世界の時間構成——社会学的現象学としての社会システム理論』ハーベ
スト社. 2014年度日本社会学史学会奨励賞受賞

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 3件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 Tada, Mitsuhiro	4. 巻 47(4)
2. 論文標題 Language, Ethnicity, and the Nation-State: On Max Weber's Conception of "Imagined Linguistic Community"	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Theory and Society	6. 最初と最後の頁 437-466
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) https://doi.org/10.1007/s11186-018-9321-y	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Tada Mitsuhiro	4. 巻 28(3)
2. 論文標題 Time as Sociology's Basic Concept. A Perspective from Alfred Schutz's Phenomenological Sociology and Niklas Luhmann's Social Systems Theory	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Time & Society	6. 最初と最後の頁 995-1012
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1177/0961463X18754458	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 多田光宏	4. 巻 38
2. 論文標題 社会学の基本概念としての時間 現象学的社会学と社会システム理論からの展開	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 社会史研究	6. 最初と最後の頁 7-24
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Tada, Mitsuhiro	4. 巻 forthcoming
2. 論文標題 Language and Imagined Gesellschaft: Emile Durkheim's Civil-linguistic Nationalism and the Consequences of Universal Human Ideals	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Theory and Society	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1007/s11186-020-09394-1	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 3件 / うち国際学会 5件）

1. 発表者名 Tada, Mitsuhiro
2. 発表標題 Emile Durkheim's View of Language: Organic Solidarity and Linguistic Unity in National Society
3. 学会等名 European Sociological Association (Research Network 29) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Mitsuhiro Tada
2. 発表標題 Max Weber's View of Language: Methodological Individualism and Imagined Linguistic Community
3. 学会等名 Alpen-Adria Universitaet Klagenfurt (University of Klagenfurt) (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Mitsuhiro Tada
2. 発表標題 Time as Sociology's Basic Concept: A Perspective from Alfred Schutz's Phenomenological Sociology and Niklas Luhmann's Social Systems Theory
3. 学会等名 Gesellschaft fuer Soziologie an der Universitaet Graz (University of Graz) (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Mitsuhiro Tada
2. 発表標題 Kommunikative Intentionalitaet: Integration von Phaenomenologie und Theorie sozialer Systeme
3. 学会等名 IfS-Lunch-Seminar am Institut fuer Soziologie, Technische Universitaet Berlin (Technical University of Berlin) (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Tada, Mitsuhiro
2. 発表標題 Imagined Linguistic Community: Max Weber and his View of Language
3. 学会等名 International Sociological Association, RC08 (国際学会)
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----